

しを思ひ、或時は妊娠中の猫の腹を撫で、其の喜ぶを見ては一人喜び、道路に出で、小石の一つも取除けたり、又は入浴者の脊中を摺りて上げなご致しては、漸く心を安んじて眠りに就く事も度々あり、何卒此上とも貴紙の御盡力に依り、右必行團體を設けられんことを切望の至に不堪候。(良民)

(186)

『一日一善』の念が盛であつて、爾かも其の爲すべき善事を見付らないとなると、時には仕様事なしに腹を太らしてゐる猫を撫で、やるようなことも

ある、右の手紙のごときは、自分で實際行つてゐるのでないど、その味が知れぬ、『一日一善』に志して見て、初めて今更らながら浮つかりとして、其の日々を暮らしてゐるに心付くので、一日に唯の一つも善い事を爲ぬとあつては、實に以つて、自分ながらも、此の生の何となく空虚であつてタヨリないのが感じられずには居れぬ。

(187)

『小生は貴紙第一巻第八號一日一善日記を讀み深く感ずる所ありて、爾來實行者の仲間に入らんと心に懸け、偕而愈々實行となれば容

易の業にあらず、昨年九月より必行し來りたる善行日記中最も多きを占むるは、路上に放置し交通を妨ぐる石竹木の類を取除きたるもの、次は竹木の小枝路上に延び交通を妨ぐる虞あるを除きたるもの、道路を教示したるもの、指道標を直したるもの、他人の善行を稱揚したるもの位に有之候、概して舍外にあるときは比較的多くを見出し得るも、舍内に在るときは實際見出し難きものに候、本日（六月十一日）は舍内に在る豫定なるを以て、如

何にして責を塞がんかと考案中、巡回日記に接し、折柄當地私立教員養成所長の來訪ありて何か生徒に對し精神修養上の談話をどの要求あり、中等教育を受けつゝある生徒に對し、談話等を爲すは小生の柄にも無之、固辭致し候へ共、容易に聽許無く、就ては午後二時より臨席し、第一足を知らる事第二學事に趣味を持つ事第三同情に富む事に就て約一時間半の談話を爲し、所長に對する責を塞ぎ申候、勿論此一事は善行か否かは今爰に判斷に苦み

候へ共、所長の來訪を空しくせざりし事丈け
は確かに善行なりとして其日の日記に載せ申
候。(同)

『小生は曾て他人の『一日一善日記』を讀み、
深く感じ候ま、爾來竊に同様の心懸け致居候、
さて心懸けて見れば、中々六ヶ敷きものにて、
僅か一日一善にても容易に見出されぬに、今
更らながら驚き入り候、日は暮れんとして未
だ何等の爲すことなく、仕様ことなしに路傍
の子供の頭を撫で、濟ますなどの事は、實際

眞面目に一日一善を心懸けてゐるものにあ
らぬよりは、其の處の味が知れ不申候、これ迄
は浮つかりしてゐたことや、氣付いては居り
ながら唯見てだけゐたことなどを、一日一善
を心懸けて以來は、餘程よく氣がつき、苟し
くも善事と見た以上、見てだけ濟ますといふ
ことなく、得たり賢しといふ風にて、直に之
れに手を下すように相成候こと、これ偏に一
日一善の心懸けよりの賜物と、獨り竊に喜び
居候、此の間もコンナ事之れ有り候、其の日

は何も爲すことなし、色々考へた末、隣りの老寄りに優しい言葉なりとかけんと存じ、晩方に弟を脊負ふたまゝ、其の内へ参り候、トコロが其の夜の曉方、其の老寄は便所の歸りに倒れたまゝ、頓死致し候、二宮先生の言葉に、小を積んで大を成すといふが之れ有り候、人格の修養などと申すことも、斯る一日一善といふような手近な邊から着手すべきものかと存せられ候、貴誌の讀者には定めて斯る眞面目なことに同感のお方少からぬ事と存せられ

候へば、一つ貴誌の御心配にて、讀者中の有志を集め、『一日一善必行團』とか何んとか、名はいづれにてもよろしく、是非一日に一善を爲すといふ篤志者の團體を作つて見たく、ツして相互に奨勵を加へ、其の日記も互に示し合はすような方法を取り度く希望罷在候、貴誌には異論なかるべきも、讀者諸兄の御考へ果して如何のものにや』(同)

『一日一善』も少しく馴れて來ると、追々眼がよく見えるようになる、氣がよく付くようになる、爲

すべき善事に見付からない、といふ心配は無くなるが、何事も初めの程こそ珍らし紛れに行つても居れ、少し日が経つて來ると、いつの間にかは横着になつて、『君は行つてゐるか』『イヤ僕は遠ふに止めてしまつた』『僕も止めてしまつた』といふよ
うなことになる、始めることは容易であるけれど、
永續といふことが中々問題である、これは何事に
限らず、萬事がそれであるが、特に『一日一善』の
如きは、尙更らさうであると思ふ。

『御説の一日一善をば青年會の必行事項たら

しめ申度、最初は各支部の役員共を集めて説
きつけ申し候、然る處、小生豫想の通り、ア
ンマリ子供らしいではありませんか、なご、
申し如何にも本氣になり不申候、實を申せば、
小生も會員一般と共に實行せんとの心懸け
は無論有し居候ひしかなれど、未だ別にこれ
まで窃に實行致し居たりしといふには無之、
他人を動し能はざりしは我が至誠の足らぬよ
りにて、小生自身が未だ實行して居らぬとい
ふことが、何よりの缺點なりしを今更らなが

ら深く反省致し、それより今日に至るの間我身ながら熱心に此の事に心懸け申候、就ては此の程再應前の役員其外多少志のある一般會員共を會して重ねて訴ふる所有之候ひし處、今度は多少の手應へ有之、其後の様子を探り申候に、幸にも實行致し呉れ居候もの四五に止まらぬらしく、甚だ喜敷き事に存じ居候、然るに、茲に今より懸念致され候は、果してこれが永續するものにや、如何に刺戟し、如何に注意したならば永續せしめ得らるべき

か、早くも懸念致し居候、併し此の懸念は大切の事と自から存じ候、此の邊の御意見今の内に御知らせ下され度願上候、云々。(著者手許着)永續させるに就いては、別に指導の法もあらうけれど、さし向き、五人なり十人なりを集めて、『一日一善會』といふがようなものを作らしめたならばと思ふ、試に雜度『一日一善會』の規定を作つて見たならば、

一日一善會規定

第一條 本會は一日一善に志ある者を以つて

作り一日一善會と名く。

第二條 會員は日々他人に對し世の中に對し
必らず一善を行ふべきものとす。

第三條 會員は各自に日記帳を備付け日々の
一善を書き留むるものとす。

第四條 本會は別に一日一善巡回日記簿を作
り順次會員間を廻送するものとす。

第五條 會員は前條の巡回日記を受けたる時
は前日并に當日の一善を記入し直に次位へ
回送するものとす。

第六條 本會は毎月一回以上會員相會して互
に一善日記を示し一善の新事項を告げ所感
を述べ益々道德の實踐躬行に努むるものと
す。

第七條 前條の會合には先輩を招して講話を
請ふことあるべし。

第八條 會員は會費毎月金〇錢を出し合はせ
雜費を支辨したる殘金を以つて雜誌又は書
籍を求め順次會員間を回覽するものとす。

第九條 本會は他の『一日一善會』と氣脈を

通ずるものとす。

第十條 會員は常に左の事項に心懸くるものとす。

一、一日一善に限れるにあらず、二善三善と數多く行ふべきこと、けふは既に一善を濟ませたらばとて眼前に見えたる一善を打ち捨て置くが如きことあるべからず。

二、一日一善を爲すには誰れの前をも憚るべからず、今日一日一善を行つて居る

(200)

など思はれんことを氣遣ふて、折角の一善を見て見ぬ振りして過すべからず。

三、日々幾度も出逢ふ善事は、例へば常に路を歩むものにありては、路傍の竹切れを片方へ寄す如き有り觸れたる事柄は、最早一善の中に加へずして、新に他の方面に一善を求むるものとす。

(201)

尙右の一日一善會へは、青年會であるならば、青年會長も會員の一人に加はることが、是非大切なことである、先づ斯ういふ風になりと仕組んで置

いたなら、假りに一ヶ月で止まるものとすれば、
少くとも二ヶ月や三ヶ月は壽命が長かるべきであ
らうと思へる。

一つの心懸は又他の一つの心懸を作らるもので、
『一日一善』に心懸けてゐる内には、自と又『一日
一悪』に心懸けるようにもなつて來る、『一日一悪』
とは今假りに名づけたに過ぎぬので、一日に一つ
づゝ悪い事を爲ようといふのでは無論ない、少く
とも一日に一度づゝは、若し悪い考へが起つたり、
ツイ悪い事を爲ようとしたりした時に、オツト待

つた、こゝじやぞ、といふ風に、其の考なり行な
りを押し込め又抑へ付けるといふなので、これも
日記にして見ると斯うである。

一〇日 嘘が喉まで出たけれどグツト噛み殺
した。

一〇日 夜少し大儀であつたけれど、横着を
してはツマらぬと思つて、談話會へ出席し
た。

一〇日 晝寢がしたかつたけれど、ソナ事
ではと思つて止めた。

一〇日 ソコに脱ぎ捨てた着物を、亦立ち歸つて衣桁に懸けて置いた。

一〇日 大方のことで尻込みしさうであつたが、元氣を出して演説した。

一〇日 疲れたので横になりたかつたけれど、我慢を出して辛抱した。

斯様な、退いて内窃かに悪念悪事を抑壓する所の『一日一悪』は、進んで外に何なりと善事を爲す所の『一日一善』よりは己に克つ力を要することが尠度多大であつて、又それだけ、修養に資する所が

少くあるまいと思へる、一方では『一日一善』に勉め、一方では『一日一悪』に心懸くると共に、又次ぎのような働きも自と浮んで来る。

『一日一善を心懸けたる當初に於ては、一善も致し候へども、一悪も随分と致し候、然るに、一善を続け居候内には、追々ど眞面目な考も出で、苟しくも一善に心懸くる身が、一方では平氣で悪い事をしてゐるようにては、甚だ恥づべき事と被存、昨今にては少しづつ、悪い方も減するやにて、これ全く一善の賜物

と存じ居候、然るに、私共の一日には、此の善い事と悪い事の外に、ツイ知らずして失態を引き起し、アトにて色々後悔するが如きことも度々有之候、所謂過失に候、此の過失をば、アトにてよく、記憶に留め、後悔を再びせざるの心懸け是れ亦肝要と存じ、昨今は亦日々『反省日記』といふものを作り居候、これも全く『一日一善』から導かれたるものに御座候。(著者手許着)

右の日記を示せば斯うである。

▲九月二十日 日々一つや二つや三つの過は屹度ある、それを書き留めて反省日記を作つて見ようと思ひ付いた。

▲二十一日 親類のお祭に行つて、御馳走を風呂敷包にして小脇に抱へ込んで歸つた、歸つて見ると、御馳走から汗が出て、風呂敷を透つて風呂敷の赤い色で、今一二度しか着ない晴衣の胸のあたりを、ヨツポド汚した。

▲二十二日 不斷に心得てゐたに、ツイ蔭口を言つた。

▲二十三日 祭が近付いたので髪を剪みに行つた、イツも五分刈にするのを、今度はどういふものか、ツイ少し長く剪んだ、氣になつてならぬ、歸つて度々鏡を見る、ヤツバリ五分刈が一番男らしい。

▲二十四日 青年談話會に行つて五分間演説を行つた、今度は元氣を出した氣で下書なしに行つた、所が途中で詰つて、顔は赤くなる、泣き顔になつてゐたであらうと思へる、初心の自分共には是非下書きが入る。

(208)

▲二十五日 町に出る積であつたが、朝の内天氣模様が悪るかつたので止めた、雨くらいの事を恐れてゐてはツマらぬと後悔した。

▲二十六日 陶器を賣りに來た、入らぬのなれど安かつたのでツイ五つ六つ買った、如何に安くても、入用でないものはツマリ高い品である、馬鹿をした。

ヤレ、一日一善』でさへい、加減面倒多いと思つてゐるのに、その上『一日一悪』とか、又は『日反省』とか、そんな七面倒臭いことがどうなる

(209)

ものか、なご、大抵の人は屹度言ふであらう、併し、眞實心に、多少でも精神の修養を志し、多少にても人間らしいものになつて見ようがあるからは、これ位のことを面倒臭いなど、言ふては居れぬのである、今日世上で、人物であると言はれてゐる方々に就いて仔細に調べて見るがよい、人物と言はれる位の人は實に人の知らぬ時から、人の知らぬ邊に、言はず語らずの間に色々の心懸けやら修業やらを積まれてゐるので、浮つかりとしてゐて立派な人になれる道は決してないのである。

『一日一善』は偽善ではないか、と懸念される人があるかも知れぬ、併し偽善といふは、ツマリ體裁を飾らう、人の目をゴマかさうとするので、其の裏には卑陋な根生なり、行爲なりが潜んでゐる、所が、此の『一日一善』は、之を行ふ動機に就ては何等深い意味の存するのではない、唯一日に一つづゝ善い事を爲よう、試に爲て見よう位の、ホンの手輕な考へからに過ぎぬ、手輕な考へも、詮じ詰めて心の奥まで追つかけて見たなら、或者は『一日一善』を行ふて、感心なものじや、と人から譽

められようといふような氣のあるものもあらうけれど、ソナナのは稀れなので、唯『一日一善』といふ言葉に引かれて、物數奇半分位に始めるといふのが事實多いのである、『一日一善』の大切なること、價値のあることを説いた處で、それに感じて、といふのは少いので、畢竟『一日一善』といふ呼聲が唯何の事はない耳に入り易いものから、ツイやつて見ようとなるまで、ある、詰まり『一日一善』を行はんが爲めに『一日一善』を行ふといふに過ぎぬ、又『一日一善』は偽善に陥り易くはあるまいか、

と氣遣かはれる邊もあらう、併し、これとても少しも苦にする心配はない、調度例へて見るなら、頑是のない幼子が、朝晩神棚や佛壇の前に手を合はすがよ様なもので、幼な子は神や佛の勿體ないことは知らぬ、知らぬのに手を合はしてゐては勘定が合はぬようであるけれど、幼な子は此の無意味な朝夕の禮拜の間に、後年牢として抜くべからざる神とか佛とかいふもの、觀念を形造る、全體、神佛を禮拜するといふは、難有いから、勿體ないから禮拜するのであるけれど、難有くも、勿體ない

くも何ともないものも、禮拜してゐるといふと、
其の間に、自から難有く勿體なく思はれるやうに
なつてくるものである、こゝが、心に種々の働き
の存する所なので、元來泣くといふは、心に悲し
みがあつてのことであるけれど、悲しみも何もな
くても、泣き顔を作つて泣き聲を出して、泣く形
式を續けてゐるといふと、お仕舞ひにはツイ〜
悲しうなつて来て涙が出て來るといふことがある、
これは全く形が心を導き、心を化するといふ働き
を存するからなのである、ソコで『一日一善』にし

た所で、心にもないことであつても少しも構はぬ、
善い事を行ひ、善い形式を續けてゐたならば、偽
善に陥る所か、それが永い間には知らず識らずに
心を導いて、眞に善い人にも、眞に善い心懸の人
にもならせるのである、内面に非常な卑劣な根生
が潜んでゐぬ限り、唯何の事はない善い事を續け
て善い事を澤山爲ることが何よりなのである。

『小生は此程隣り村の小學校に於いて行はれ
たる青年講話會に参り、豫ての一日一善に就
いて一席相話し候處、休憩時間に青年會員と

小生共どの雑談が色々ど賑はしう相成候、時に一人の青年は左右を顧みて、ナント皆さんお互も一日一善を行つて見ようではありませんか、と言葉を出し候、小生は心竊かに快感を覺へ居候處、其の學校の一人の教員、これは何も悪氣のあつてのことには無論なかりしに候へども、右の青年の眞面目なる提議に對して、一日一膳では腹が細い、一日十膳位は食はねばならぬ、と冗談を申し候、此の不注意の冗談の爲めに、折角芽を出しかけ申し候

一日一善も、一同のドツト笑ふ聲の内に、全く芽を折られて仕舞ひ申し候、其の青年の提議は斯くして全く葬られ、従つて小生の話も一ト先づ打ち壊はされ申し候、お互は、他人の立派な話を承はり候へば、これは大切な一粒の種子であるとして、傍から手を出し土を盛りて之を助長するの心懸け大切なるべきに、サリとは此の教員の不心得さよ、と竊かに憤慨致し候、事一日一善に關し居候まゝ、これを貴下の許に報し申候』(著者手許着)

『一日一善』は、事が一寸瑣細に見ゆるので、中には頭から下なすものもあること、思へる、が併し、總べて何事に限らず、少しでも取る所があるものは、決して之を毀損せぬように、助長さすといふ心懸けが大切であらう、況して『一日一善』如きに於いては尙更らである。

『本年度に於ける郡内の壯丁八百餘人、内高等卒業生二百幾十人に候處、徴兵検査の當日、此の二百幾十人に就き、日記を附け居るや否や一々尋ね試み候處、附けて居りますと答へ

たるもの十名に足り不申、甚だ頼りないことに感じ申候、或地の青年會は、會員必行事項の一つとして孰れも日記を致され居候よし、豫て承はり居候處、青年會と致し候ては、道路の修繕、荒蕪地の開墾も結構の事に候へども、會員各々修養の爲めに、斯る日記を致し候ことは、先づ以つて肝要の心懸と今更らなから被存候、右十名足らずの青年に對しては、深く奨勵を加へ、早速手許にて豫て御話の『巡回日記』を作り、此の人々の間をば廻送致す

事に致し、既に十日ほど前より實行中に御座候、コ、に面白き話し有之候、君は日記をつけて居ますか、と一々尋ね居候處、ソレは船員にて候ひしが、イヤ此の前までは日給でありました、が、一ヶ月程前から月給になりました、と答へ候、日記と日給とを取り違へたるものに候、何とか日記勵行の妙案は無之もの候や』(『長民』)

日記と日給とを聞き違へぬまでも、日記のある青年は、右の手紙に見えてゐる通り、いづれの地方

でも、まだ少いのではあるまいかと思はれる、日記を勉めてゐると、筆が伸びる、字が覺へられる、全く補習教育の一科として、一つの勉強に當る、其の上放埒になり易い人の心に、日々多少のキマリを附けることにもなる、所が、此の日記といふもの、馴れて來ると何んでもないけれど、初めの程は中々續け難いものである、ソコで、小學校に居る間から始めさせて置かねばならぬといふので、讀本の中にも早くから、其の手本を出してある、所が、先生から八釜しく言はれるので、子供は、

仕様事なしにやつてはゐるけれど、所謂千篇一律で、『あさ早くおきておまんまをたべて學校へ行ききました、かへつてからあそびました』次ぎの日も『あさ早くおきておまんまをたべて』次ぎの日も又それなので、子供自身も面白くなし、又時々手に取つて見てやる先生なり、父兄なりも、寧ろ面倒を感じるようになって、ツマリは、子供の日記はごうも仕方がない、といふことになり、折角の日記帳が、日記帳として役に立つたは、先づ四分の一か五分の一か位のもの、アトは雑記帳に變つて

しまふ、如何なる風にして子供の日記は導いたなら、面白味を持たせて續けさすことが出来るであらうか、これは誰れも考へてゐる所なのであるが思ふにそれには又、此の『一日一善』を利用して、『一日一善』からして自から日記に導き入れるといふことが、一つのやり方ではあるまいかと思ふ、それは、日記を勧める前に『一日一善』を勧めるのである『皆さんは今日から毎日是非一つづつ善い事をせねばなりません、何にも善いことのない日には、犬の頭をなで、やる、それでもよいのであ

ります、そして、その爲た善い事は、毎日雑記帳の
一と所へ附けて置きなさい」といふ風に説く、
子供には子供相當の『一日一善』があるもので、尋
常の三年生位にもなれば、屹度一善も行へば、日
記を附けることも出来る、勿論此の一善とても、
日々異つたことばかりはない、が併し、日々同じ
事にした所で、子供は善い事をしたといふ一種の
誇を以つて、雑記帳に書き入れるので、それほど
他人事にならぬ、又時々手に取つて見てやる方
も、ドンナ善い事をしてゐるかど、其の都度多少

の樂みを以つて見ることになるので、双方相待つ
所があつて、タゞ頭から日記を附けよといふ
よりかは、屹度効力があることに思へる、又一方
では、何にか一つは善い事をせぬといふては、其
の日の日記に附けられぬことになるので、ソコで
自ら一善に心懸けることになる、『一日一善』によつ
て日記を導き、日記によつて『一日一善』を促すと
いふことになれば、これが所謂一舉兩得なのであ
る。

斯様にして子供の時から日記の習慣をつけて置い

て、日記が一年間もつゞき日記帳の五六冊も出来て来ると、最早途中止めをするのが惜しくなつて来て、とうとう永久に續くことになる、子供が日記帳を抱へて學校を卒業することになれば、實に結構であるが、今茲で、新に青年に對して日記を始めさせようとなる、子供に對するよりも一層六ヶ敷い、餘程の心懸けのあるものでないと、中々手を着けぬ、所が、これも前の子供に對すると同じ筆法で、日記は先づ後に控へさせて置いて、『一日一善』をさし出して、これから引き入れる方が

捷路であるかの如く思はれる、一善日記は、日記としては頗る簡單のもので、日々一二行位で済むものであるが、併し一度日記の筆を執り出して来ると、追々には普通の日記をも附けることになつて来る、疾に日記の必要を知つて、日記を附けたいものと思ふてゐるものは、先づ此の『一日一善』から着手するがよいと思ふ、さすれば、日記と『一日一善』と二つを得られることになる。近頃青年會の隆盛に連れて、處女會が各地に出来かけて来た、此の處女會は、青年會とは違つて、

會の仕事として、これといふほどのものがない、時々講話會又は講習會を開く位のものである、處女會としてはそれだけで結構であらうけれど、尙日常の申合せとして、日記を附けさせて、細い心懸けを養ふて置くなどのことは、他家政を執る上に於いても、育兒を爲す上に於いても、甚だ大切のこと、思はれる、が併し是れ亦着手が中々六ヶ敷い、所がこれにも前と同じく『一日一善』から導き入れたなら、存外容易いかの如く思はれる、『一日一善』が處女會の掟となり、日記が亦た一般

に行はれることになれば、眞に結構の事と思はれる『一日一善』に志してゐたなら、思ひ設けぬで、日記といふ副産物を得られる、『一日一善』に日記は自ら附きものである。終に望んで、各種の日記簿の出版者に對して切に希望する、どうかこれからは日記簿の毎日の欄に、『一日一善』の欄を置いて貰ひたい。

横着な息子、けさも似非病を作つてまだ寢間に子ソベツてゐる、親さいふものは難有いもので、ソ

實行百題

一日一善終

レなら寢間ねまで御免ごめんを蒙かうつて食べよさてできたての
お萩餅はぎもちを入れものゝまゝで抱かへて行いつた、姑しほらくし
て問とへば、ごうしても一つが喰くへぬさいふ、それ
なら何なにか薬くすりを飲のめよと行いつて見みれば、みな平たいげ
て唯一たつだけ食くひ残のこしてゐた。

あすもまたさく起き出で、勉めなん

窓にうれしき有明の月

實行百題

●青年會の總會とか、講話會とかに出席した時は、成るべく中途に立つてはならぬは云ふまでもないこと、タトヒ會が終り、講話が濟んでも、會長とか幹事とかから、今日はこれで閉會致します、との挨拶が無い以上は静に待つてゐるべきである、それが、講師がまだ壇を下りかけて居れるばかりなのに、早やドヤ〜と總立ちになつて歸を急ぐ、といふことが、多くの會合に於て見る所であるが、

これは實に見苦しい。

● 苟しくも男子たるものは、着物の縞柄などの話
は決してせぬものである、君のこの羽織はドコで
買ったか、この兵子帯はイクラしたか、なご、撫
でサスツて見るなごは、甚だ男子らしく無い。

● 柱にモタレかゝるもので無い、獨り柱ばかりで
はない、椅子にモタレかゝるとか机にモタレかゝ
るとか、田畑に行つては鋤をツいて鋤にモタレか
ゝるとか、總べて此の物にモタレかゝるといふ姿
は餘り見得のよいものではない、苟しくも物にモ

タレかゝつてゐる時は、大ダサに云つて見れば、
知らず識らずの間に自家が獨立の元氣を損じる、
吾れは吾れの腕一本で自分の運命を開く、決して
他人のお慈悲には預りませぬ、といふ程の元氣の
あるものは、不斷に注意して、決して柱にも壁に
もモタレかゝるものではない。

● 店頭で代金を拂ふ時、例へば五錢の買物に對し
て十錢銀貨とか二十錢銀貨とかを拂つてツリ錢を
貰ふ時には、黙つて其の十錢なり二十錢なりを出
してはならぬ、十錢とか二十錢とか口にいつて先

方に渡すべきである、ソレでない、二十錢に對して五錢のツリ錢を出して、さうでしたか、十錢銀貨であつたと思ひましたが、なご、互に入らぬ口上を戦はさねばならぬやうなことが少くない。

●長途には、右左と度々履物を履き替えるがよい、草鞋や草履は一寸水に浸して用ふること。

●汽車の窓から無暗に物を抛つてはならぬ、土瓶の空や牛乳の空びんなどをボン／＼捨てるのは眞にツマらぬこと、座の隅に片寄せて置けば、アトでそれ／＼始末される、何にもボン／＼捨てたと

て、それが決してエラソウには見えぬ。

●汽車のガラス窓に頭をぶつかつてはならぬ、これは人を馬鹿にしたやうな話なれど、今日ではまだ／＼斯るアワテものがあるといふこと。

●下駄をば引き摺つて歩まぬこと、下駄の後齒の片チビしてゐるは、全く其の人の張氣のないのを證據立てゝゐるのである。

●家の内には不斷に草鞋を切らしてはならぬ、草鞋は家運長久の守本尊である。

●人前で、無遠慮に煙草の煙を吹いてはならぬ。

●年の若いものが煙草を燻らすは、法律違反であるばかりでなく、實に生意氣の甚だしきを示すの看板である、生意氣であるが故に巻煙草を燻らし、巻煙草を燻らすが爲めに益々生意氣となる。

●用事があつてヨソに行つたなら、先づ一番に用事を済ますがよい、所が多くは入りもせぬ世間話に時を潰し、歸る段になつて漸く、實はこれく、と用事をいひ出す、それ故折角用事を足しに行きながら、其の内亦人がやつて來たので、イヤ亦参りませうと、到頭話を出さぬしまひに歸ることが

ある。

●講話會場などに後れて這入る時には、又キ足を
するやうにして、音を立てぬ心得肝要である。

●時計の針の止まつたのを、タゞの半日でも其の
まゝに捨て置いてはならぬ、其の家の身代も止ま
つてゐるかの如くに思へる。

●佛壇のお花は枯れぬ内に、取り替えねばならぬ、
佛壇のお花の枯れてゐる内は、信仰の枯れてゐる
内、ドチラかといへば家内が不和の内なのである。
●横目を使ふは男の禁物である、見るのなら正し

くシヤンと見るがよい、横膝も甚だ感心せぬ、膝を組むのなら遠慮なく胡座をかくがよい、横目横膝は全く煮え切らぬ態度である。

●近頃は一般に兵子帯が行はれるので、角帯は祝儀不祝儀の折を除いては、滅多に見ることが出来ない位、所が兵子帯では決して腹に力が入るものでない、兵子帯は腹を回します、他人と談判事をしたり、大切な場所へ出る時などには、小倉の堅い角帯をシメ込んで行くべきである、角帯をシメ込めば腹の据りがついて来る、若し又已むを得ず兵

子帯を纏ふならば、後の方でシヤンと結び切らねばいかぬ、兵子帯は元來ダラシのないもので、其の兵子帯をグル／＼巻いたまゝのハセ帯は、益々ダラシのないもの、六ヶ敷言へば色法心法を化すどでもいはう、帯の結び様が気分を左右する。

●農家の青年であつて、殊更に子指の爪を長くしてゐるものがある、一目見たゞけで嘔吐の種類。

●隣席の人を差し措いて、其の次ぎの人と語るもので無い、間に挟まれてゐる人は甚だ手持無沙汰を感じる、此の理を今一つ押し擴めて、お湯が沸

きました入りにお出でなさい、と隣家を呼ぶので
も一番の隣家を措いて、二番目三番目の隣家に早
く聲を懸けるものでない。

●これ位一般に教育が進んでゐる今日、まだ人の
前で耳に口をあて、ヒソ／＼話をしたり、又は多
勢の中で指しするものがある。

●葬式の場で、パツパと巻煙草を吹き出したり、
高声でシカも笑を交せて所構はず大話してゐるを
見ると、アレでも人間かと思はれることがある。

●履物は氣を付けて、チャンと揃えて脱ぐこと。

●田舎の人が、お湯に這入るを見ると、一度這入
つた以上、一切外に出ぬで、シヤボンも糠袋もみ
なお湯の中で使ふ、アキレてしまふ、と都の人は
いつも言ふ、こればかりは田舎ヒイキのものも辨
護の途がない、垢はお湯の外で落すべきもの。

●常に口をポカンと明けてゐるものは、如何にヒ
イキ目に見た所で、どうも賢うは見ぬ、或人が
馬鹿を見せよ、といった時、直に親を見せた、成
程子にかけては親ほど馬鹿なものはない、次に間
拔を見せよといったら、口をポカンと明けて寝て

ゐたものを示した、但し断つて置くが、其の口からは年に不似合な涎を垂らしてゐた、夜寝てゐる時でも、自ら口が噤いでゐるまでに常に心懸けるがよい、口を噤いで居れば呼吸も自然に長く深くなるので、自と衛生法にも適合するのである。

●少しは反る位にして、決して脊を丸くせぬこと、脊が丸くなつては意氣が伸びぬ、又十分に膝をば伸ばすこと、十分に膝が伸ばぬでは脊が正しくはならぬ。

●町中を通るに、右を見たり左を見たりしてキヨ

ロ／＼してはならぬ、自轉車にブツつかつたり車夫に叱られるなどの不體裁はないまでも、キヨロキヨロしてゐては心が落ち着かぬ、男は落ち着きが第一であるといふ其の落ち着きは、町中のやうな人のこみ合つてゐる間で修養するに心がけるがよい、町に行けば勸工場などに這入つたと同様、店頭を一見したゞけでも、多少見聞を廣める、見聞を廣るめる心懸けで左右を見廻はすならマダしも、唯ワケもなくキヨロ／＼することだけは止めて貰ひたい。

●町に出たなら、一寸でも本屋へ寄つて見ることに、表紙を一目見ただけでも、ハ、こんな本もあるものかな、と爲めになる。

●途を行くには、滅多の事にアトを振り向いてはならぬ、ヤタラにアトを振り向くものは、先づ概して腹の据つて居らぬ人であらう。

●これは、途を行くには左側を通ること、といふことが言ひ出されぬ前の話である、或る親爺が子供を教へて、途を行くには決して端を行くものでない、真ん中を行け、トコロが或るお大師さんの

命日の朝に、蓬園子をしやうといふので、其の子供に砂糖を買ひに遣つた、園子は出来たが中々砂糖が戻らぬ、ドコで道草を取つてゐるのか、親爺が迎へに行つて見ると、子供は砂糖を提げて歸りかけて途の真中で一人の子供と合掌立ちに立つた。まゝ、ヂットしてゐる、コチラの子供もいづれは親爺から同じ事を教へられて居たものであらう、親爺は思はず手を拍ち、出来したく、砂糖はオレが持つてかへつてやる、園子が出来たら持つて来て食はし、決して負けてはならぬぞ、成程左側を

行くべきではあるけれど、心の内では、途の真ん中を行くほどの氣概を持つて居るべきであらう。

●衝突しそうな時には、イツも左に避けることに確定して置くこと。

●一日に是非二三度は、天を仰いで大に口を開け、グツト太陽を呑み込み、両手を持つて胸から下腹の方へ撫で下ろすこと。

●鼻の孔には毎朝水を通すがよい、『外氣に觸れる皮膚の中で一番薄くて弱い鼻の孔の皮膚である、それ故冬分に風は多く鼻から引く、常に鼻の孔に

水を通すと、皮膚が追々丈夫になり、従つて風邪の豫防になる』斯様に説いてゐた人があつた、さうかも知れぬ。

●煙草を嗜む代はりに空氣を嗜み、人が煙草を吸ふ時には自分は殊更に空氣を吸ふがよい。

●こゝから何々町まで幾里ありますか、先づ五里です、大に、と禮をいつて一里位行つた時、試に二度聞いて見ると、同じく、先づ五里ですと答ふ、甚しきは、一里手前では五里と答へたものが、今度は六里といふこともある、路傍に住ふものは、

ソコから主なる場所への道程をば最も正確に知つて置くがよい。

●コ、の店にもあるが、マア前の店に行つて買はうと思ふ品物が、折角ソコにあるにも拘はらず、マア前に行つて、といふてはソコを通り越し、生憎前の店には品切れしてゐてロクなものなく、到頭心ならずもツマらぬものを買はねばならぬことがある、コ、の店で買つてはイカぬ、是非前の店で買ふ必要があるなら、それは特別、さもなければ、ドコでも目に當つた時直に買うがよい。

(250)

●他所に行つて、路を尋ねたり、家を聞いたりするに、折角其の人が叮嚀に教へて呉れてゐるにも拘らず、鵜呑にし早合點して、イヤ難有、サウですかイヤ分りました、とソコに半は聞き捨てにして行くことがある、聞く時にはよく氣を付けて聞かねば、少し行つて、又問はねば分らぬことになる。

(251)

●夜分など人に訪ねられた時、其の人の歸られたアトで、直に戸を締切るものでない、如何にも、ヤレ寝むたや、といつて追ひ出したやうに當る。

●どうぞこれを、といつて、上履を差出されたる時、これを直に足にするものでない、これはどうも、といつて一應屈んで手に取り、ソシて後に足にするものである、手で出されたものを直に足に受けるといふことは無い。

●お土産などを貰つた時、其の貰つた品物を、イツまでも座右に其のまゝに置くものでない、早くいづれかの高い所に上げて置くものである。

●紙幣は粗末に扱つてはならぬ、自分が持ち切りにはならぬのであるから、兎角大切にするといふ

念が薄いけれど、所謂公營物を愛するなどの公共同心も、斯る手近な邊から自ら養成に心懸くべきであらう。

●雑誌の一種や二種は椽の下にある、といふは、鶏を二三羽飼へば、卵の代で雑誌の一二種は取れる、鶏も三十羽五十羽といふてはそれ／＼小屋とか食料とかの手當を要するけれど、二羽や三羽ならば、食料は掃き溜めや水菜の株や薯の尻などで充分、ソレで椽の下に追ひ込んで置けば結構である、讀書のしたい青年は必らず鶏を飼ふがよい。

●出入には告げよ、と昔から教へられある、一寸近所へ行き隣に行くにも、是非行先きを告げることに定めて置くがよい、所が、一々告げらるれば結構、ソレが往々にして告げ難い、告げるワケに行かぬ行先があるから困る、自分は決して行先きの告げられなかつた事は曾て一度もない、斯う廣言して見たいものである。

(254)

●老人の前では、ドコソコの誰れ〜は死なれた、など、死んだ人の噂は成るべくせぬもの。

●ワシはドウもフケが多うて、など、言ひつゝ、

人前で無遠慮に頭を掻きむしつてバラまくなごは慎しむべきこと、又人前では爪を剪まぬこと。

●借物を返すには、成るべく直接がよい、他人を頼まぬがよい。

●人の話中に時計を出して見たり、客人を前に置いて時計を見るなどは、決して禮でない。

●横に向いた椅子に其のまゝ腰をかけたなり、ネジれてゐる座布団に其のまゝ座つたりするものでない、チャンと眞直にして置いて、腰をかけたなり座つたりするもの。

(255)

●「隣の内は富限者らしいが、存外金がないもの
見え、毎日一枚づゝ新聞を買ふて居るらしい、町
から毎朝持つて來てゐる。レ内は貧乏ではある
けれど、一枚づゝ買ふやうな體裁の悪いことはせ
ぬ、此の間もカタめて買ふて來たが、一貫目が二
十五錢であつた、コンナ滑稽話がある、成程古新
聞は、一貫目が二十錢とか三十錢とかであらうけ
れど、古雑誌と來ては殆んど價がない、所が、其
の古雑誌でも、成るべく早く讀んで他人に與へた
なら、一部幾錢の生き値が持たされる、雑誌は反

(256)

古にせぬやうに早く人に頒つべきである。
●碁、將棋の助言は絶対にせぬもの、又碁將棋に
は「待つて」は口が腐つても言はぬもの。
●どうで出さねばならぬ手紙の返事は、成るべく
早く出すがよい。
●客人事をしてゐる時は、牛とか馬とか鶏とかに
氣を附けてやらねばならぬ。家内にマゼクリ事が
あつて、寄つて集つて御馳走などを食べてゐる時
は、ツイ浮つかりして、得て家畜への手當を忘れ
るものである。

(257)

◎祖父祖母又は父母の好物は、第一に何、第二に何、第三に何、それをよく知つて居らねばならぬ、甚助のおかあさんは、一番に肴が好きであつた、と修身書に書いてある。

◎請取證書の類は、大切に保存して置くこと、英吉利あたりでは、何れの商店でも又は銀行でも、一切請取を出さぬ、幾萬の大金を預けても、よろしい預りました、唯此の一言だけである、所が我國では、請取證がなくては夜が明けぬ、コンナ一等國では、請取證などは大切に仕舞つて置かねば

ならぬ。

◎玄關から上るには、真正面からは上らぬもの、少し片方へ寄つて履物を脱ぐこと。

◎郵便切手は定め場所に正しく貼ること、切手のネデレた手紙は受取つて心地の悪いものである。

◎今時の青年であつて、店前でコップ酒を飲んでゐるものは少くないが、菓子や果物を食つたり果物を食つたりしてゐるものは珍らしくない、コップ酒は見苦しいが、菓子や果物ならば見苦しくないとい

ふことはない、食べるのなら持つて歸つて食べる
がよい。

●約束をして置いて、まだ果たさずにある事はな
いか、時々斯く顧みるべきである。

●枕下にはマツチを置いて寝ること。

●未見の友と手紙の取りやりをするは楽しいもの
で、又勉強になるものである、未見の友を作るに
心懸けて居るがよい。

●青年は、何にか一種は是非腕力を使ふ遊戯を心
得ふべきである。

●言ふまでもないが、親の年を忘れてはならぬ。

●農村青年の越中禪は決して見善いものではない、
禪はヤハリ六尺に限る、所が、越中禪でも纏つて
居ればまだしも、中には全く禪なしのものがある、
ソナナ輩に限つて、脛の下の方まである女の腰巻
見たようなのを巻いてゐる、唾棄すべきである。

●讀むべき雑誌とか書物とかは、常に一冊づゝは
切らさぬように持つて居らねばならぬ。

●眠氣のついた時、若し浮つかりとして、頭が後
に反つて、口がポカンと開いたなら、それこそ一

代の笑はれ物である、眠氣がついて堪えられぬ様
になれば、早く頭を前に傾けるに限る。

● 便行へは朝々行くに限る、日立つてから便所へ
出入してゐる人は、真に見苦しい。

● 返さねばならぬ品物を、まだそのまゝにしては
居らぬか、時々顧みること。

● 君は何にか讀んで見たい書物はありませぬか、
斯う尋ねられて、直に書物の名を言へぬは正に恥
辱と心得ふべきこと。

● 人から相談されたことは、ドンナ事柄であつて

も、決して一口に打消してはならぬ、先づ一應は、
さうですな、と受けて置いて、さて其の次ぎに打
消すならば打消すべきである。

● 毎朝便所に行くには、イツも先登第一の功名を
心懸くること、他人が、今出たばかりの便所は、
どうも心地よきものでない。

● 若い者の首巻は論にならぬ。

● ヤレ火事じや、といふ折には、先づ何物から取
り出すべきか、平素に於いて試みに一應考へて置
くべきである。

●後程のちほどでよい、と言いはれたことでも、ごうで済すませねばならぬ事ことなら、今いまの内うちに早はやく済すませて置くこと。

●久振ひさしびりに出逢であつて、近頃ちかごろはごうです、などと尋たずねられた時とき、イヤ不相變あひかはらブラ／＼やつて居をります、など、よく答こたへるけれど、ブラ／＼やつて居をるなご、いふことは、言葉ことばの上うへだけでも言いはぬことである。

●百姓しやうであつて、路傍ろぼうにジヨウ／＼と小便せうべんするものがある、路傍ろぼうでの小便せうべんは是非ぜいひ田畑たはたへ片足かたあしかけて

田畑たはたの中なかへ飛ばし込むもの。

●不ふ断だんは胡座あぐらをかいてゐるものも、三度さんどの食しょく事じの時ときのみは、屹きつ度と膝ひざを直なほして畏かしこまること。

●初はじめての家うちに宿やどつた時は、夜中やちゆう萬一まんいちのことがあつたならば、何處どこから飛とび出だすべきであるか、一寸つとあたりを見廻みまはして置くも用心ようじんの一つである、町まちに出でて宿やどに宿やどつた時ときなどは、特とくに此この心懸こころがけを要えする。

●手紙てがみの文句もんくに『無事ぶじ消光せうくわう罷在かりあ候ころ』といふ定文句ぢやうぶんくがある、併しかし『消光せうくわう』といふは面白おもしろくない、何なんだ

か遊んでゐるがように聞へる、「無事勤勉」と直したいものである。

◎常に言葉を約するの心懸を怠つてはならぬ、入りもせぬことを喋々と言つてゐるのは、實に聞き苦しいものである。

◎出したものは入れて置き、明けたものは締めて置き、豎にしたものは横にして置き、出したら出したきり、明けたら明けたきりにして、始めることは始めるけれど、後をキチンと片付けぬといふが、大きく言へば我國民の缺點である。

◎『モテる』とか『ナツてゐる』とか『ナツテゐない』とかいふような流行言葉は、成るべく使ふものではない。

◎立つてゐる時は、自と足が揃つて『氣を付け』の姿勢に副ふてゐるように、常に心懸けたい、足を正すは亦心を正す所以のものである。

◎『忙はしい』といふことをば口にせぬこと、忙はしいから忙はしいといふに、何にも理屈はないよ
うであるけれど、此の忙はしいといふ言葉は、忙はしいものですからツイ失禮しました、などと動

もすると、何にかの申譯に使はれる。

●申譯をせぬこと、悪かつたならば謝するがよい、申譯は、概して自分が當然負はねばならぬ責任を脱れようとすもの、甚だ聞苦しい、見苦しい。

●青年の集つてゐる席などで、ツイ一人が、下品な話ではあるけれど、何にかの間違ひで、音をさすことがある、スルト皆がクツクと笑ひ出して、暫らくの程は話しが出来ぬ、前に立つて話してゐるものは、濫面を作つて、皆の静まるを待つといふ有様、これが多い、傍で音がしても素知らぬ顔

(268)

で、顔の位置をも動かさぬものは、實際見上げたものである。

●講話會などで、後れて戸を排して入つて來るものがある、**「右向け右」**と號令を懸けられたかのように、皆が一齊に其の方に向いて、甚しいのは、其の入つて來た人が腰掛に腰を掛けるのまで見届けて、ヤツトのことで元の位置に顔を直すものがある、コンナきよろづき易い青年、又は青年會は概して程度が卑いのである。

●母親へのお土産としては、時々、手附きとか、

(269)

釜搦みとか火箸とかいふような臺所道具がよい。
●小學校を卒業する頃は、誰れも皆筒袖である、あの筒袖をば、十九歳二十歳二十一歳といふように、一年でも長く用ひるようになりたいと思ふ、青年の衣服は追々には屹度筒袖になるであらう。
●郡内各町村にあたつて、少くとも一人づゝは知人を作しらへて置くべきこと。
●子供への土産は、本、雑記帳といふ類のものに限ること、これ迄のように菓子類は止めること。
●腹八分目とはよく言つてある、モ一つ食はうか、

モ一杯飲まうか、ごうしようか、と思案される時は、モウ早や腹に調度イ、加減になつてゐる時であるから、イツでも食はぬ方飲まぬ方がよい。
●暑い寒いを言はぬこと、言ふた所で仕方がない、暑いといふ言葉が得て蔭に回る動作を導き、寒いといふ言葉が得て火鉢に寄る言譯となる。
●イツの欠伸も譽めたものではないけれど、講習會などで聞いてゐたものが、講話の済んだ直ぐそのあとで、所構はず大欠伸は、ヤレ〜退屈であつた濟んでくつろいだといふように聞えて、取り

分け悪い、全體欠伸は、決して人に見せるものでも、聞かせるものでもない。

●新聞は常に二面記事を読むに心懸くべきこと。

●机のあたりは度々片付けるがよい、書物も度々積みかへるがよい、書物は表紙だけ見ても、幾分か内容が頭に浮ぶ。

●葉書二三枚はイツも手許に切らさぬもの。

●人力車には滅多に乗るものでない、若し已むを得ぬことがあつて乗ることがあつても、決して先方の家の屋敷内に乗り込むものでない、少し手前

からトント下りて、車をばソコから返すべきである、車のまゝで屋敷内に乗り込み、歸りにも屋敷内から車に乗るなどいふは、全く禮儀作法を辨へぬもの、仕業である。

●不具者は殊更に勞はらねばならぬ、それに聾松とか、啞の八公とかいふて、名前の上にワザく聾とか啞とかを付けるものがある、濟まぬことである。

●或人から手品のやうなものを教はつた、とする、その或人といふは、或る用事を持つて、アチコチ

に出懸ける人なので、行つた先きでは、用事の濟んだアトで、右の手品を傍の人に授けては、愛嬌を振り蒔いてゐる人なのである、斯る時の心得としては、其の手品は永く其の人の愛嬌たらしむべきものであるから、たとひ自分が知つたからとて、其の人の居らぬ席で、其の人に先んじて、其の手品の種を明かすべきでない、次に其の人が来て例の手品を演じようとする時に、それは既に皆が知つてゐるといふことになつては、其の人をして手持無沙汰に陥らしめることになる、これは何にも

獨り手品のやうなものに限らぬ、他人の意見、他人の發起した事などは、ドコまでも其の人の意見、其の人の發起たらしめて、怪我にも黙つて他人の意見などを自分のものにするでは決してない。●假りに甲乙丙の三人が連れ立つて、道を行つてゐるとする、スルト向ふから一人がヤツて来る、それが乙の知人である見え、イヤお久しうなど、乙は立ち停つて挨拶する、斯る場合に、甲と丙の二人は、自分等の知人ではない、自分等に用はないといふ風で、二人だけは知らぬ顔で、サツサ

と行き過ぎることがあるが、乙の話が密談であるとか、又長談に涉るとあれば兎に角、さもなければ己等も亦傍に一寸立ち停つて、共に帽に手を懸け又待合せもするといふが、連れたる乙に對する禮でもある。

●新聞を讀んでも、三面記事の、男女の卑猥に關する事柄は、斷然讀まぬことである。

實行百題終

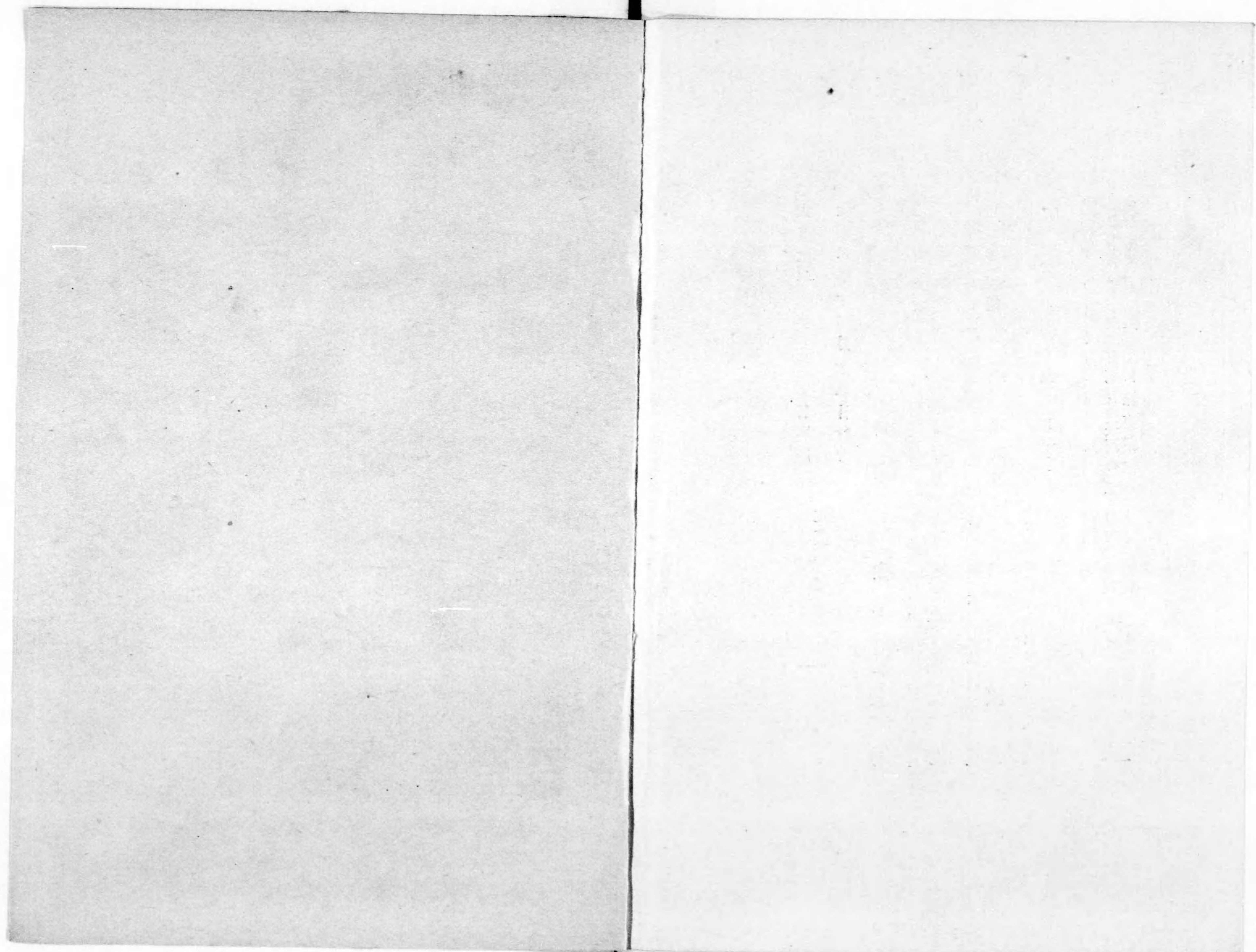
大正二年十二月十二日印刷
大正二年十二月十五日發行

定價金五拾五錢

不許
複製

著者 山本瀧之助
發行者 河本龜之助
印刷者 河本俊三
印刷所 千代田印刷所

發行所 東京市麹町區平河町五丁目卅六番地 洛陽堂
振替口座東京二〇九一四番
電話番町四二五八番



274
489

終

